

西南学院における 中高大の連携プログラムと教育実践

河谷はるみ・梵真沙子¹

A Cooperative Educational Project of
Seinan Gakuin Schools and University
and Its Related Practices

Harumi Kawatani and Masako Soyogi

I. はじめに

西南学院は1916年、米国南部バプテスト派の宣教師C. K. ドージャーによって、福岡市初の男子の私立中学校として創立された。当初104名の生徒と9名の教職員でスタートした「私立西南学院」は現在、幼稚園、保育所から大学院まで、約1万人の園児・児童生徒・学生が学ぶ総合学園である。今なお、キリスト教を基盤とした独自の教育を実践しながら、キリスト教的人間観と世界観に立ち、奉仕の精神をもって社会に貢献する人材を送り続けている。

2022年度から新高校学習指導要領が実施され、総合的な学習の時間は「総合的な探究の時間」となり、その目標は「変化の激しい社会に対応して、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成すること」とされた⁽¹⁾。探究科目として理数科「理数探究基礎」、「理数探究」をはじめ「古典探究」、「地理探究」、「日本史探究」、「世界史探究」が新設され、公民科は

¹ 西南学院中学校・高等学校教諭、人権・「同和」教育委員会

従来の「現代社会」に代わる新しい必修科目「公共」としてスタートした。この新科目「公共」の目的は、生徒が近い将来、社会に参画し、様々な課題と向き合い、それを解決する力を養うことである⁽²⁾。私立西南学院中学校・高等学校も体験的な活動や主体的に取り組む経験、そして生徒が校内だけでなく、校外の世界も知ることを通して、より多くの課題を見つけ、解決する能力を育てている。

国（文部科学省）は「高等学校と大学との接続における一人一人の能力を伸ばすための連携（高大連携）の在り方について」のなかで「特定の分野について高い能力と強い意欲を持ち、大学レベルの教育研究に触れる機会を希望する生徒の増加」を予想し、「高等学校・大学の双方が、後期中等教育機関・高等教育機関としてそれぞれ独自の目的や役割を有していることを踏まえつつ、高等学校と大学との接続を柔軟に捉え⁽³⁾」その実践の枠組みを提示している。高大接続は「高等学校と大学の教育内容の接続」、高大連携は「高等学校と大学間におけるネットワークの構築」であり、後者は高校生が大学で講義を受ける、大学教員が高等学校で講義（講演）を行うことなどを通して、高校生の大学における学習に対する目的意識や将来に対する意識の向上を図ろうとするものである⁽⁴⁾。

本稿は、はじめに西南学院中学校・高等学校の人権・「同和」教育の実践を整理し、実際に「体験すること」の有用性を述べる。次に人権・「同和」教育の一環として、初めて西南学院中学校・高等学校と西南学院大学が連携したプログラムと教育実践をまとめる。これらの連携全て、発起人は西南学院大学の学生たち（西南学院中学校・高等学校卒業生）で、「社会福祉」を学修するなかで「中学生や高校生が持つ、福祉＝介護という『ふくし』のイメージを変えたい」、「『ふくし』の領域は幅が広く、私たちの様々な生活場面と深く関わっていることを伝えたい」という思いを募らせ、その「思い」を西南学院中学校・高等学校教諭に伝え、大学教員と繋いだことで連携が実現したのである。それだけでなく、学生たちが自ら「ともに生きる」というテーマを設定し、プログラムを全て企画・運営したことに、西南学院における中高大連携の大きな意義がある。最後に上智大学高大連携プログラムを紹介し、西南学院における中高大連携の意義と今後の展望を述べていきたい。（河谷はるみ・梵真沙子）

Ⅱ．西南学院中学校・高等学校における人権・「同和」教育の実践

西南学院中学校・高等学校の教育の土台は、聖書である。生徒が自分自身を愛するように隣人を愛する「真の隣人」となることを願い、チャペルや聖書の授業、また年に2回行われる人権・「同和」特設授業で諸課題を学ぶ。社会に存在する差別を見抜き、許さない心と姿勢を育てることは、多様性を大切にす社会・多文化共生社会に生きる、地球人・国際人の重要な課題と考える。

図Ⅱ-1は、西南学院中学校・高等学校で実施している人権・「同和」教育のプログラムである。

西南学院では、中高6ヶ年教育の中で多岐にわたる諸課題に網羅的に取り組めるようなプログラムを作成し、各プログラムで①映像視聴、②講師の先生から講演を聴く、③担任による授業展開を実施し、当事者から話を聞いたり、担任からの授業を受けたりすることを通して、自分について、また自分や他者との関わりについて考える機会を多く設けている。

図Ⅱ-1 西南学院中学校・高等学校における人権・「同和」教育プログラム

		中 学 校		高 等 学 校	
		前期	後期	前期	後期
テ ィ マ	1年	ともに生きる	コミュニケーションを 考える (いじめ問題)	なぜ人権・「同和」 教育を行うのか	国際化社会における人権 ～過去から現在～
	2年		インターネットと人権	しょうがいをもつ 人と共に生きる	性と人権
	3年		社会とつながる	差別の歴史に学ぶ	ともに差別とたたかう ～結婚・就職差別～

(梵作成)

2023年度は実際に「体験すること」が更なる理解や行動に繋がると考え、体験会など、主体的かつ積極的に取り組む機会を検討した。まず5月に、教員希望者を対象としたゴールボール体験会を実施した。約30名の教員、参加者全員でパラスポーツを学び、理解を深めた。教員からは「年齢を問わず、しょうがいの有無に関わらず、みんなが楽しめるとはこのようなことだと感じた。その大切さを実感した」などの感想が寄せられた。高校1年生では、後期の

テーマ「国際化社会における人権」のもと、放送部（1年生）に協力を依頼して、当事者や関係者にインタビューを行い、映像の作成も行った。外国にルーツがある人やその関係者から話を聞き、今の福岡における問題点や今後解決していくべき事柄をまとめた。

また高校2年生（希望者）は、「しょうがいを持つ人とともに生きる」というテーマで車いす体験（校内）を実施した（資料Ⅱ-2・資料Ⅱ-3参照）。

[プログラムの詳細]

- ①（教室内での事前学習）車いすの説明
- ②車いす利用者が困る場面を考える。
- ③教室内に作ったコースを動いてみる（狭い道・段差・トイレなど）。
- ④感想の共有
- ⑤校内の決められたコースを実際に移動する。
- ⑥校内のバリアフリーおよび校内のUDを考えてみる。

車いす体験に参加した生徒からは「狭い道やスピードが速くなった時は、想像以上に怖かった」、「スカートで車いすに乗ることは難しいと思った」、「校内でも移動しにくい場所がいろいろ見つかった」、「高い位置のものは取りにくかった」などの感想が寄せられた。課題としては、券売機の硬貨投入の場所が高い場所にあること、図書館や自習室のスペースは音があまりたたないようにカーペット生地のようにになっているが、通常の床よりも行き来が難しいこと、エアコンの通気口が多くあり、凹凸で動きにくい箇所があること、多目的トイレの予備トイレトペーパーの設置スペースが高いところに置いてあること等が挙げられた。そして、これらの校内課題は学校にも報告（情報共有）をした。

車いす体験は、課題を見出すだけでなく、解決するためにはどのようにしたらよいか、生徒自身が考えるきっかけにも繋がった。生徒からは校内設備のハード面のみならず、心理的側面に関する感想もあり、実際に「体験すること」の有用性を実感した。

（梵真沙子）

資料Ⅱ-2 車いす体験 ワークシート

2023 年度前期 車椅子体験 ワークシート

1. 事前学習

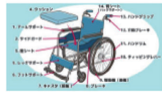
①車椅子利用者の困ることってどんなことだと思いますか？



2. 体験コース・注意事項について

コース (1日の流れをイメージしたもの)
(日) 高校準備教室
(授業①) 理科 理科教室 → バイオリアルームへ通りぬる
(授業②) 体育 アーナル (→アーナルの入り口まで) ※アリーナの中には入らないで下さい
(休憩) 多目的トイレ
(休憩) プリント提出 職員室
いったん正門付近まで行く。 くれぐれも車や歩行者に注意!
(昼食) 食堂 → 券売機で券を購入し、券窓口利用 ※実費は利用しない。買う分だけ。
(授業③) 多目的ホールの入り口まで (スロープ)
(休憩) 図書館 本を借りる → 実室に借りてみて下さい
(授業④) 体育 グラウンド ※ グラウンドまで由たらすぐ帰って来
(日) 高校準備教室

- 2人(もしくは3人)組とする
- ・体験者および支援者どちらも経験する
- ・不自由と感じることなどは、記録しておく
- ・実際に昼食や更衣は行わないが、同様の行動する
- ・教室は保護者面談中、チャベルでは説明会等行われているので配慮する
- ・校内の移動およびエレベータの使用に関しては、くれぐれも注意する



3. 体験を通しての気づき・感想など

自分で動いている	
押してもめわらさきのスピードはどんな風に感じますか？	
車いすから見た視点で気づくことは？	
車いす利用者向けの設備/多目的トイレを体験してみる(本当に役に立つものか)	
高いところ、低いところ、狭いところ、広いところ、段差、知識などを体験する	
スロープは上り下りしやすいですか？	
校内で、どこもこうとうした方がいいというポイントはどこでしたか？ 学校の印象を 全体の体験を振り返っての感想など	

2年()組()番 名前

ホームページ「【車椅子の部位名称】14の部位別にわかる役割や注意点」

<https://www.heartpage.jp/contents/magazine/08-00484>

(最終閲覧日：2023年6月11日)

福岡市広報誌「心のバリアフリー(保存版)」

<https://www.city.fukuoka.lg.jp/data/open/cnt/3/52572/1/kokoronobariahuri.pdf?20230221102649>

(最終閲覧日：2023年6月11日)

(これらを参考にして梵が作成)

資料Ⅱ-3 車いす体験の様子



教室内を、スピードを変えて押してもらう（普通とはやめ）



ジグザグのところを押してもらう



段差を上り下りする①



段差を上り下りする②



グラウンドまで行ってみる



緩やかな坂道を、自分で漕いだけり押してもらったりする



アターナの入口まで行ってみる（スロープ利用）



多目的トイレ（ドアを開けることも難しい）



手すりを持って、車椅子から移動する①



手すりを持って、車椅子から移動する②

(許可を得て掲載)

Ⅲ．西南学院における中高大の連携プログラムと教育実践

1. 西南学院中学校と西南学院大学の連携講座

2023年11月9日西南学院中学校・高等学校で、学生（西南学院中学校・高等学校卒業生）の企画・運営による連携講座（テーマ「ともに生きる」）を実施した。これは西南学院中学校・高等学校人権・「同和」教育の一環で、西南学院中学校・高等学校と西南学院大学が連携した、初めてのプログラムであった。当日は、中学生約20名と大学生9名が参加した。

はじめに、学生が講演（題名「こころのバリアフリー」）と「白杖」に関する説明を行った。その後、教室での学びを踏まえて、中学生と大学生がペアになり、校内でアイマスク体験を行った。資料Ⅲ-1は、連携講座を企画した発起人（学生）が作成したワークシートと当日の様子（講演・アイマスク体験）である。

中学生からは「アイマスク体験で目の見えない人の気持ちが理解できた」、「障がいのある人を見かけたときは、見た目で障がいの内容を判断しないようにしたい」、企画・運営した学生からは「交流会を通じて、自分の想像をはるかに超えて中学生に『福祉』の考えが行き届いていることが分かり、交流会を開催した意義があった」などの感想が寄せられた。連携講座は「中学校と大学」という学校の枠を超えて、交流が深まったとともに、双方で福祉の学びを深めるよい機会となった⁽⁵⁾。これは単年度で終わらせることなく、2024年度以降も継続して実施できるよう、西南学院中学校・高等学校（人権・「同和」教育委員会）と西南学院大学（人間科学部社会福祉学科）で検討を進めている。

資料Ⅲ-1 西南学院中学校と西南学院大学の連携講座

2023年11月9日(木)
西南学院大学河谷ゼミ×西南学院中学校・高等学校
連携講座 ともに生きる



大学生とアイマスク体験をしよう！

～ともに考えるふくしの未来～



()年()組()番 名前: _____

1. 事前学習

日常生活で困ることはどのようなことだと思いますか？

- ① _____
② _____
③ _____
④ _____
⑤ _____

2. 実際に体験してみよう！

○経導側・歩く側を体験して気が付いたこと



例) 声掛け	例) スピードを確認しながら歩いたほうが良いと思った。
声掛け	
経導	
階段	
段差	
方向転換	

○自然についての動画を見て

3. 事後学習

○グループで共有したこと

全体を通しての感想や考えたこと

○一日の流れ

日時：11月9日(木) 15時から16時30分

場所：中学予備教室4

15:00	自己紹介・事前学習
15:10	野田周佑さんのお話 テーマ：こころのバリアフリー
15:25	お話の感想・野田さんへの質問など
15:40	アイマスク体験
16:10	グループワーク・事後学習
16:25	学んだことのふりかえり
16:30	解散

～メモ～



○一緒に歩く時の注意点



- ・誘導する場合は、相手にどのようにしたらよいか聞いてみましょう。
「私の腕につかまってください。どちら側がいいですか。」
- ・介助する人が半歩前に立って、介助する人の腕をつかんでもらいます。

○階段・段差での介助



- ・階段に直角に近づき、一旦停止してから階段があることを知らせます。
「上ります（下ります）」と声をかけてから歩き始めましょう。
- ・体験する人に、段数や長さを知らせるとイメージがわきます。
- ・階段が終わったら「終わりです」と伝え、体験する人が最後の一段を上がった（下りた）のを確認して一旦停止します。途中で段の高さや階段の幅が変わるときにも一旦停止します。

<参考>文庫バリアフリーからともに生きる社会を夢ぼう！ 体験してみよう、「視覚に障害のある人」
(http://www.kofu.ac.jp/fooc/freedom/visim_je.html) (最終閲覧：2023.10.30)

西南学院

(企画・運営した学生が作成)



連携講座「ともに生きる」を企画・運営した学生たち



講演「こころのバリアフリー」



中学生と大学生がペアとなりアイマスク体験

(許可を得て掲載)

2. 西南学院高等学校と西南学院大学の交流会

2024年3月18日西南学院大学でテーマ「福祉について学ぼう」と3つのコンセプト「知らない世界を知る」、「多様性」、「将来について考える」のもと、

西南学院高等学校と西南学院大学の交流会、いわゆる「高大連携」を実施した。これも学生たち（西南学院中学校・高等学校卒業生）の企画・運営による交流会で、西南学院中学校・高等学校人権・「同和」教育の一環として、初めて実施した。

交流会に向けて、事前に西南学院中学校・高等学校（梵）と西南学院大学（河谷）の間で高大連携の意義を確認し、その目的を定め、学生たちと情報共有をしながら準備を行った。当日は、社会福祉に興味と関心のある高校1年生と2年生の計7名（高校教員2名）が参加した。

[目的]

- ①人権・「同和」学習と繋がり深い人間科学部社会福祉学科と人権や福祉、法律等について学び合う機会を設ける。
- ②大学とはどういうところなのか、どのようなことを学ぶのか等について、大学に実際に行き、ゼミを受けることで、将来についてより深く学ぶ機会を設ける。オープンキャンパスとは違う形式で、個別具体的に実施できるように計画する。

はじめに、学生が所属する研究室（ゼミ）の概要を紹介し、ゼミで研究している内容や教員と学生との関わり方について、自らの経験を交えながら説明し、高校生へ進路選択にあたってのアドバイスを送った。次に、孔英珠准教授（西南学院大学人間科学部社会福祉学科）が2023年度に実施した西南学院大学教育推進プログラム「多文化共生社会への誘いー海外研修プログラムー」を紹介し、海外での学びが自身の視野を広げるきっかけになることを講義した（資料Ⅲ-2参照）。そして、中村秀郷准教授（西南学院大学人間科学部社会福祉学科）が研究分野である社会福祉について、身の回りで起きている事象を交えながら紹介し、大学で学ぶ意義や身近なことから問題提起をする大切さについて講義した。

続けて学生の立場から、学生生活（高校生と大学生の時間の使い方の違いなど）を話し、車いすの機能をレクチャーした。交流会に参加した高校生からは

「大学生は自由な時間が多い一方で、自分自身で時間を有効に活用する必要があることが分かった」、「『福祉』には様々な分野があることが分かり、社会福祉へ興味を抱いた」などの感想が寄せられた⁽⁶⁾。

2024年度は単一の学科やゼミではなく、西南学院大学人間科学部（児童教育学科・社会福祉学科・心理学科）が共通テーマ、コンセプト、3つの目的を定め、8月オープンキャンパス後に実施する。プログラム内容は模擬講義、グループワーク（学生生活について）、車椅子体験とし、連携発起人の学生たち（西南学院中学校・高等学校の卒業生）の協力を得る予定である。

共通テーマ：「ひとを知る、ひととの関わりを考える」

コンセプト：「知らない世界を知る」、「多様性を理解する」、「将来について考える」

目的：①人権・「同和」学習と繋がり深い人間科学部とジェンダー・人権、社会福祉、心理について学び合う。

②大学とはどういうところなのか、どのようなことを学ぶのか等について、大学に実際に行き、大学の授業を受けることで、将来についてより深く学ぶ。

③8月のオープンキャンパスとは違う形式で、個別具体的に実施する。

将来は、横断的に学部が連携（共通のテーマを設定）し、高校の「総合的な探究の時間」と関連づけ、この高大連携プログラムでの学びを大学での学びへと繋げていくことを目標としたい。
(河谷はるみ・梵真沙子)

資料Ⅲ-2 西南学院高等学校と西南学院大学の交流会



ゼミ紹介と高校生に向けて進路選択のアドバイスを送る野田周佑さん
(西南学院大学3年(当時)・西南学院中学校・高等学校卒業生)



教育推進プログラム「多文化共生社会への誘いー海外研修プログラムー」を紹介する
孔英珠准教授(西南学院大学人間科学部社会福祉学科)

(許可を得て掲載)

Ⅳ．西南学院における高大連携の意義

2023年4月1日こども家庭庁が発足し「こどもや若者が自分らしく成長できる社会」、「こどもまんなか社会」の実現が目指され、同日こども施策を社会全体で総合的かつ強力で推進していくための包括的な基本法として、こども基本法（2022年6月成立）が施行された。2024年4月1日からは、事業者による障害のある人への「合理的配慮」の提供が義務化されている。

このような社会動向を受け、教育現場でも「授業のユニバーサルデザイン（UD）化」が目指されている。これは学力の優劣や発達障害の有無に関わらず、すべての人にとって「分かりやすい」、「理解しやすい」授業をいう。授業のユニバーサルデザイン（UD）をはかること、インクルーシブ教育を目指すこと、そして発達課題を抱えている生徒・学生への支援を模索する一方、生徒の成長を考えるうえで「分かりやすい」、「理解しやすい」ことが必ずしも良いことなのか、という意見もよく聞かれる。何が生徒・学生のためであり、どのようなことが生徒・学生の成長に繋がるのか、ということを学院全体の組織として考える必要がある。

西南学院中学校・高等学校には、診断の有無は問わず、様々な課題を抱えた生徒がいる。今は「自分が感じている困りごとに向き合い、どのように解消していけばよいかを考える」、いわゆる「自己権利擁護」ができるよう、中高生時代（生徒）に向き合わせることを目標としている。ただし、中高生という時期（発達段階や周囲や環境により変化しやすい）であることも考慮しなければならない。また私学の特性上、限られた予算や人員の中で教員にきめ細やかな支援が求められているが、生徒が自分自身の課題として向き合わせるために、教員としてできることを継続して検討する必要もある。

高大連携の最大の意義は、大学の先生や学生から直に話を聞くことができることである。一部の高校生は、詳しい学びの内容を理解していないままイメージにとらわれ、進路選択をして大学に入学し、大学入学後に「イメージと違った」と感じてしまうこともあるのではないだろうか。高大連携プログラムを通して、大学で学ぶことの意義や大学生活そのものをイメージできると、確かな

進路選択、また高校における深い学びや学習意欲にも繋がっていくであろう。

実際に高大連携プログラムを行った際、西南学院大学社会福祉学科で学ぶ専門科目は「高齢者福祉」、「障害者福祉」、「子ども家庭福祉」、「精神保健福祉」、「地域福祉」、「社会保障」、「司法福祉」、「ソーシャルワーク」と多岐にわたり、そのアプローチも様々であるが、交流会に参加した生徒たちは、福祉の幅の広さをあまり知らなかったように見受けられた。これは、他学部・他学科でもいえることではないだろうか。

また、特に課題を抱えた生徒にとっては、自分の知らない世界に飛びこむこと（大学進学）は、大きな不安でもある。例えば「大学での生活をイメージしにくい」、「履修登録などの方法が分からない」、「授業の受け方が分からない」、「困ったときにどこに相談すればよいのか分からない」などである。生徒に不安があっても「もう大人になったんだから」と保護者が生徒（子ども）に自立を求めてしまうと、生徒は知らないこと、分からないことが多くあっても頼る場所が分からず、通学さえ困難になる場合もある。年齢が近い「大学生」から話を聞く機会は、先生には聞けないようなことも率直に質問ができ、将来の自分の姿もイメージができるのではないだろうか。このように高大連携プログラムは、課題を抱えた生徒の不安の解決・解消にも活かされると考える。

大学生の立場からは、中学校・高等学校の生徒に教えることを通して、今、大学で学んでいる意義と専門分野を確認することができる。今回の連携発起人は、全て学生たち（西南学院中学校・高等学校の卒業生）である。大学で専門分野「社会福祉」について「講義・ソーシャルワーク演習・ソーシャルワーク実習」を通して理解を深めるなかで、中学生や高校生に伝えたい「ふくし」への思いが募り、その思いが西南学院中学校・高等学校と西南学院大学の教員を繋ぎ、連携講座まで発展（実現）させたのである。これはまさにソーシャルアクションで、そのプロセスはソーシャルワーク（実践）そのものである。

今回の連携は、学生たちが高校生に「大学で学ぶ」という、ひとつのロールモデルを提示しただけでなく、今後組織として必要な西南学院中高大連携の可能性を広げたといっても過言ではないだろう。（河谷はるみ・梵真沙子）

V. おわりに

上智大学は2022年度から、高校生の探究学習を大学生がサポートする高大連携プログラム（全4回）を実施している。これは2020年から実施している高校生向けオンライン探究学習プログラム「せかい探究部」の受講生と、上智大学基盤教育センターが新たに開講した科目「探究的な学びを創る」を受講する学生が、探究学習を軸に共に学び合う仕掛けを組み込んだ高大連携参加型授業である。

上智大学では、高校生と大学生にとっての企画の意義を次のとおりとしている。西南学院における高大連携は、2023年度から開始したばかりであるが、その意義には、上智大学と重複した部分が見受けられる。

[高校生] 自身の探究をきっかけに大学や大学生と関わる機会を持ち、大学生の視点や知識・ネットワーク等のサポートを得ながら現在取り組んでいる探究を深めるとともに、将来的な大学での学びを想像することにつなげる。

[大学生] 探究学習や研究調査等を実践的に学ぶことで研究や社会活動での基盤となる力を養うとともに、ファシリテーションやリーダーシップ等の社会的スキルを伸ばす。また、高校・大学・社会をつなぐ連続的な学びを意識し、大学での学びを再考するきっかけとなることも期待できる⁽⁷⁾。

大学にとっての高校は、学生を送り出してくれる機関であり、地域貢献や大学振興の場となる⁽⁸⁾。学校法人西南学院は「キリストに忠実なれ」の建学の精神に基づいて、真理の探求および優れた人格の形成に励み、地域社会および国際社会に奉仕する創造的な人を育てることを使命としている。そしてこの使命に基づいた教育力は、それぞれの深い専門性と幅広い教養、国際色豊かな教育プログラム、実践型の各種プロジェクトを通して「グローバル化が進む社会で生き抜く力」である。

今回の中高大連携プログラムは、校内（学内）のみで実施したが、今後は「地域」における様々な生活課題や地域住民のニーズの把握に向けた、フィールドワークなども取り入れ、総合的・多角的な視点で生徒や学生が主体的に学ぶ内容も検討していきたい。地域で起きている現実の問題に直に向き合い、そこで暮らす誰もが尊厳を持って生きられる社会を目指す福祉教育は、福祉マインドの育成やボラティア精神に繋がるからである⁽⁹⁾。これからも、高大接続と高大連携の意義を確認しながら、地域社会の「知」の拠点である教育機関、西南学院としての連携プログラムと教育実践を積み重ねていきたい。

（河谷はるみ）

謝辞：連携講座の発起人で企画・運営を担当いただいた、西南学院大学人間科学部社会福祉学科春岡茉奈さん、安武奈月海さん、野田周佑さん、講座に協力いただいた河谷はるみ研究室の皆さん、交流会で講義を担当いただいた孔英珠准教授（人間科学部社会福祉学科）と中村秀郷准教授（人間科学部社会福祉学科）、西南学院中学校・高等学校教職員の皆様、西南学院大学鶴林那奈氏（教育推進部教務課）と中牟田翔氏（総合企画部広報・校友課（当時））に心より感謝申し上げます。

(1) 文部科学省「総合的な学習（探究）の時間」

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/sougou/main14_a2.htm

（最終閲覧日：2024年5月6日）

(2) 玉川大学「2022年度より高等学校公民科の必修科目「公共」がスタート。新科目の中身と求められる教員について教育学部教育学科樋口雅夫教授に聞く（前編）」

https://www.tamagawa.jp/education/dream_uni/detail_19446.html

（最終閲覧日：2024年5月20日）

(3) 文部科学省「高等学校と大学との接続における一人一人の能力を伸ばすための連携（高大連携）の在り方について」

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/020-17/houkoku/06040408/001/004.htm

（最終閲覧日：2024年5月6日）

(4) デーリー東北（2024年5月18日配信）「六ヶ所高、総合の時間に「高大連携」青森大教員が探究テーマ助言」は、青森県立六ヶ所高（蛭名良一校長）が総合的な探究の時間に青森大との「高大連携」を取り入れたこと、青森大の教員が生徒のテーマ

設定の段階から関わり、サポートしたことを掲載している。

<https://news.yahoo.co.jp/articles/6df13e75ea33691ddb7df006b3f9de0fbcaf25e0>

(最終閲覧日：2024年5月19日)

- (5) 西南学院大学「社会福祉学科の学生と西南学院中学校の生徒による交流会が行われました」<https://www.seinan-gu.ac.jp/news/2023/15139.html>
(最終閲覧日：2024年5月6日)
- (6) 西南学院大学「社会福祉学科の教員・学生と西南学院高等学校の生徒による交流会が行われました」<https://www.seinan-gu.ac.jp/news/2024/15318.htm>
(最終閲覧日：2024年5月6日)
- (7) 上智大学「高校生の探究学習を大学生がサポートする高大連携プログラムが始動しました」https://www.sophia.ac.jp/jpn/article/news/release/20221205press_tankyu/
(最終閲覧日：2024年5月20日)
- (8) 長尾勝恵「高大連携事業 これまでの高大連携の取組と今後の在り方について」(ふくしと教育通巻37号、2023年) 56頁。
- (9) 河谷はるみ「第8章福祉政策と関連政策」(川村匡由編著『入門 社会福祉の原理と政策』、ミネルヴァ書房、2022年) 144頁。

【参考文献】

- 大野真理子・磯尚吾・河西奈保子・溝口侑「高大連携活動における大学教員と学生の役割に関する一考察－1回で完結する講演型の事例に着目して－」
(大学入試研究ジャーナル第33号、2023年)
- 小林洋司「高大連携事業 高大連携による福祉の学び [その1] 大学側からみた高大連携実践」
(ふくしと教育通巻35号、2023年)
- 吉田高子「高大連携事業 高大連携による福祉の学び [その2] 高校側からみた高大連携実践②」
(ふくしと教育通巻38号、2024年)
- 花岡道子「高大連携授業の可能性 大学生と高校生のナナメの関係構築を目指して」
(人間文化研究所年報第18号、2023年)
- 前田哲男「高大連携事業に係る高大連携センターのとりくみ－高校と大学が連携して生徒・学生を育むためのこれまでの取り組みと今後の方向性－」
(地域総合研究叢書第2号、2023年)
- 九州大学「障害者支援について」
https://www.kyushu-u.ac.jp/ja/university/publication/handi_capped-support/
(最終閲覧日：2024年5月6日)
- 九州大学「アクセシビリティ・ピアサポーターについて」
https://www.kyushu-u.ac.jp/ja/university/publication/handi_capped-support/handicapped/
(最終閲覧日：2024年5月6日)